

◆二〇二四年十一月十日の「戦雲」上映会は、午前午後とも会場の視聴覚室七十人の机を外して、九十余りの椅子席がいっぱいの入場者だった。明日にも雪の季節到来かと言う時期、誰もが畑仕事や文化行事で多忙を極める中で、二時間十二分という映画の長さにもかかわらず、強い集中が感じられた。アンケートの内容も濃いものが多かった。ウクライナやガザの戦争をマスコミで眼にしても、沖縄の先島諸島に自衛隊のミサイル基地が、住民の反対運動の続く中で出来上がり、要塞列島と化していることは知らないでいたのだ。

私達の太陽の子の会は、一九四四年前灰谷健次郎の小説『太陽の子』の映画化作品の上映運動で出会い、以後四十四年間映画や講演会などを開き、沖縄や反戦、子ども、女など、疎外される側から考えてきた。沖縄の人々の、圧倒的な力の前に諦めずに闘い続けるその声に勇気をもらいながら。三上智恵監督の「今からでも遅くはない、共に目撃者となり今という歴史を背負う当事者になつてほしい」という声が胸にひびく。

梅津純子

◆大糸線をのりにいった。学生時代、合宿で木崎湖にいったとき、仕事に就いてすぐ、グループで燕から檜までを縦走したとき、区間でのつたことがあるが、通しでのつたことがなかった。北から、およそ県境で車両をのり継ぐ。北側がJR西の、南側がJR東のもので糸魚川からのワンマン一両の運転スタツフも、南小谷で折り返し、もどつてゆく。乗客は外国人も多く、とくに荷をもつ人、そこにみたのはグランツーリスモのワッペンのようなもの。紅葉の頃には、二両編成もあるということだったが、土曜日、一両で混んでいた。多くが南小谷で、特急にのり継いでいる。南下という言葉があるが、ここまでは、ひたすら谷間をのぼつてゆくので、下がつてゆくイメージの関東とは違う。大糸線を通しての人はいまいかわずか。目的地というものが無い旅は、印象もただ通過してゆくようだ。帰り、上諏訪からあずさののつたが、これが座席未指定券というもの、すわれないまま、外国人も含めて多くがデッキの床にすわりこんだ。苦行だった。

小野澤繁雄

◆空が鉛色になり葉山のつぺんが白くなると、間もなく里にも雪が降る。まだ大丈夫だと思つている矢先、雪が降つてきた。畑には白菜、大根を残したまま。妻から収穫を急かされると雪は野菜を甘くしてくれると言いついてみたものの、寒いし冷たいし最悪だった。毎年のことながら冬は暑い夏よりも嫌だ。山形県人は炬燵の中で丸くなって春が来るのをじつと待つ。「しづり雪撫針茸の縮む朝」

神村ふじを

◆昨年、パンデミック・コロナが5類に移って、何とか日常を取り戻したが、今年は猛暑に見舞われた。冷房は、十月になってもお世話になり、老人には電力消費は個人単位になり心苦しく思われた。温暖化の故と言われるが、地震に噴火に洪水、乾燥と大火など天変地異を伴う異常気象の現象が際立った一年だった。まだ年内に何が起こるかわからない。常に、あらゆる異変に対処出来るように心がけたい。

河村郁子

◆畑仕事を傍らにして、毎年十月下旬から三月いっぱい餅搗きに明け暮れている。ひたすら肉体労働で神経も使うので、文芸に親しむ精神的余裕はまったくないといっている。それで今回の投句は休みにしようか、でも、それはつまらない。労働のことを句にすればいいのだ、と思いついた。私たちの会では、会員と友人たちが減農薬で栽培した餅米を餅にして、ある比較的大きな生協に卸している。これが会の経営の柱なので、製品にして出荷するまで気が抜けない。一シーズン約五トンの米を加工するのだ。改めて句にしてみると、この仕事、なかなか楽しいのではないか。「疲れた、疲れた」とばかり言っていないで、もっとおもしろい句が作れるのではと思えてきた。いま農業は後継者不足で危機に瀕している。農地がどんどん荒地になっている。それをこの餅の製品化で何とか食い止めようと、七十歳を前にした私たちは踏ん張っているということでもある。

新野祐子